地の人へ、風の人へ。
浅間北麓じまんマガジン

きたかる

2016年
やっと春、もうすぐ夏号
Since 2010
VOL.4（リニューアル創刊号）

狩り マイ♡ラブ 狩猟女子、今日も山へ！

表紙の人・武田つぐみさん

新しい『きたかる』の表紙を弾ける笑顔で飾ってくれたのは、北軽井沢のキャンプ場に勤めながら、ハンターとして活躍する武田つぐみさん、26歳。長野原町・初の「狩猟女子」。昨年からは北軽井沢の猟友会に所属し、親子ほど年の離れたベテランハンターと一緒に、この冬、北軽井沢での「巻狩り」（多人数で取り囲む狩り）にも初めて参加しました。猟期の最終日。あらかじめアタリをつけておいた猟場に、勢子（動物を追い立てる役）と射手に分かれてスタンバイ。すると狙いのイノシシは、つぐみさんの目の前に！「慌てて狙ったんですが、外しちゃいました」と悔しがるつぐみさんに、「そりゃあ最初からうまくやられたら、こっちの面目が立たねえわな！」と、ハンター歴50年近い先輩たちは、娘を見守るお父さんのようにニコニコ。近年、北軽井沢でも増加する鹿やイノシシによる農作物被害。個体数調整のため、若手ハンターの育成が急がれるなか、救世主のごとく登場したつぐみさん。「人と野性動物の軋轢を減らしたいと思ってハンターになりました。被害対策ももちろん重要ですが、なにより狩りは楽しいものだよということを伝えたい」。命の重さを丸ごと知っている人の眼は、山麓の空に負けないくらい澄んでいました。

PROFILE：TSUGUMI TAKEDA
前橋市出身。北海道の酪農学園大学にて野生動物の保護管理と狩猟管理学を学ぶ。20歳で狩猟免許を取得。卒業後は全国的にも珍しい「猟区」が設定された西興部村のNPO法人スタッフとして、エゾシカ猟を通じて環境調査やハンターガイドを務める。2015年より北軽井沢「スウィートグラスキャンプ場」に勤務。

特集・地質観察ジオツアー

浅間山がつくった大地、5万年の物語。

誕生から5万年が経つといわれる浅間山。その長い噴火活動の上に成り立つ浅間北麓エリアは、そこらじゅうが、いわば生きた「地質ミュージアム」。一枚の地質図を手に、痕跡を訪ね、生きた山の営みを体感するジオツアーへと出かけましょう！

はじまりは一枚の地質図から

そもそも「足元がどうなっているんだろう？」と気になり始めたのは、一枚の地質図を見たのがきっかけでした。火山地質学の専門家、理学博士の早川由紀夫先生がつくった『浅間火山北麓の2万5000分の1地質図』。長野原町や嬬恋村の台地がいくつかの色に分けて示されています。地図にはもちろん詳しい注釈も載っていますが、眺めているだけではどうもピンと来ない。ならば！と、地図を製作したご本人である早川先生にコンタクト。「あのぅ、見ているだけではよくわからないので、実際に一緒に歩いてもらえないでしょうか…」と図々しいお願いをしてみたところ、「いいですよ、やりましょう！」との快いお返事。専門家に見どころやポイントを解説してもらうツアーなんて、まるであの人気番組「ブラ〇モリ」みたいじゃない⁉と盛り上がるわが編集部。

2月半ば、まだ雪も残り、気温も氷点下まで冷え込む朝8時。「OKしたはいいものの、こんな寒い日にやらなくてもいいのでは…」という心の声がありありと顔に浮かんでいる早川先生には申し訳ないものの、空は快晴、浅間山は白く輝き、これぞジオツアー日和。さあ、「下を向いて歩こうツアー」へ、出発です。

2万4千年前の落としもの

最初に向かったのは、応桑に点在する小高い丘のひとつがよく見える場所（❶）。目の前の丘を指差して、さっそく先生のガイドが始まります。

「この丘、なんだかわかりますか？2万4300年前に黒斑山が崩壊して起きた『塚原土石なだれ』が残した〝流れ山〟です。応桑にはこんな〝流れ山〟がいくつも残されてますね」

——地図の青い部分が土石なだれに覆われたエリアで、中にポツポツと濃い青で示されているのが〝流れ山〟。たしかに、国道を走っているだけでもこの辺り、左右にポコポコとこんもりした丘が見えますが、2万4千年前の山からの落とし物だったとは知りませんでした！

「この山崩れは相当大きなもので、吾妻川に流れ込み、今の高崎や前橋の大地を作りました。火山はだいたい1500m成長しては崩れるを繰り返します。そう考えると今も、もういつ崩れてきてもおかしくないんだけどねぇ…」

——（先生、真顔でさらっと怖いことを言いますね…。気を取り直して）この地図で見ると、応桑のあたりは2万4千年前の土石なだれ以降、大きな噴火や山崩れの影響は受けていないということですね？

「そうですね。このあと説明する約1万5千年前の『平原火砕流』は、熊川や赤川に沿って流れたので、応桑は被害に遭わずに済んでいます」

——ふむふむ、だんだん地図の見方が分かってきました。

「この辺りの土を見てください。真っ黒でしょ。これ、クロボクといって、噴火のなかった時期に風が運んで積もった土です。1万年かけて1m積もる。応桑は、クロボクが2.5mと厚みも深いので、耕作もしやすいのではないでしょうか」

なるほど。時代別・地質別に色分けされた地図からは、農作に適しているかどうかなど、今の私たちの生活にも大きく関わる環境の違いが見えてきます。

15000年前か、900年前か

続いて向かったのは、大屋原地区と甘楽地区が接する胡桃沢付近（❷）。車を降りると、左手に一段高い土地が土手のように連なっています。これって「ブラ〇モリ」でもよく話題になる段丘&高低差じゃない⁉とはしゃぐ隊員たちに、先生はニヤリと、

「では問題です。高い方と低い方、どちらが古い段丘でしょうか？」

——それは、新しい方が後から積もって高くなったのでは…？

「ブブー、不正解。高いほうが古い段丘。1万5800年前の噴火で発生した『平原火砕流』（地図のピンクの部分）が覆ったところ。そして今、我々が立っているのが、今から900年前の平安時代・1108年の噴火による『追分火砕流』（同じく緑色の部分）が流れた部分です。古い噴火でできた台地が、沢の流れで長い時間をかけて浸食され、できた谷の部分に新しい噴火の流れが入り込む。火山の裾野の高低差はそうして作られます」

少し離れたところで、地層が剥き出しになった崖を見つけました。

「『平原火砕流』が発生した約1万5千年前の噴火は、浅間山史上最大。火砕流は山の四方に広がり、ここ大屋原や大笹方面でも厚い堆積物が見つかっています。その堆積層の上に、同時期に降った淡い黄色の軽石（嬬恋軽石）が2mほど積もり、さらにその後数年間に降り積もったと見られる火山灰も1m近く層をなしているのがわかります」

——今では見渡す限り豊かな高原野菜の畑ですが、地表から1.5mほど掘り下げれば、今も1万5千年前の地層に出会えるんですね。

「一方、その上にさらに1108年の『追分火砕流』が到達した群高地区や大学村などは、キャベツ大サイズの岩の塊がゴロゴロ。被害を受けてからまだ900年しか経っていないのでクロボクも浅い」

——あ、だから耕作地よりも牧草地や別荘地になっているところが多いんですね！

少しずつ、噴火の歴史と現在の町の姿が重なって見えてきます。

早川先生が用意してきてくれた地質図のボードで、現在地を確認しながら進みます。

サンランド別荘地内にある、直径 30m ほどの黒岩。
こうした黒岩は飛んできたのではなく、土石なだれによってはこばれてきたもの。

土石なだれは空を飛ぶ⁉

お昼休憩後、「じゃあここからは『江戸』にいきましょう」と先生。いよいよ200年前、1783年「天明の噴火」の痕跡探しの始まりです。

——「天明の噴火」といえば、鬼押出しの溶岩が流れ出し、土石なだれが鎌原の集落を襲い大きな被害を出したんですよね。

「そう、でも実際にはそのストーリーはもうちょっと複雑です。鎌原の悲劇を生んだ土石なだれが山頂から発生したものではないということを知っていましたか？」

——え？　山のてっぺんからではないんですか？　じゃあ、どこから？

「噴火の順番からいくと、まず鬼押出し溶岩が火口から溢れ出し、次に吾妻火砕流が溶岩を避けるように東西に流れました。その後、鬼押出し溶岩の先端が、当時、山腹にあった柳井沼という湿地に到達し、水に触れて激しい水蒸気爆発を起こし、その振動で大量の土砂が動いていっせいに北へ流れ下った。様々な調査を重ねて、僕はそう考えています」

その土石なだれ、スピードは相当なもので、先生の予測では時速150km以上。その証拠ともいえる場所へ案内してもらいました。（❸）「ここは山からの方向に深く切れ込んだ沢があります。その沢を越えた東側まで土石が流れた跡が残っているのですが、崖自体は相当深く、おまけに沢の部分には土石なだれの痕跡はないんです。どういうことだと思いますか？」

——ええっと。てことは、崖の上を飛び越えた？　いやぁ、まさかねぇ。

「そのまさかです。土石なだれは崖をも飛び超える速さだったと考えざるを得ない。そう言っても、みんな信じてくれないけれど（笑）」

特集・地質観察ジオツアー

——空飛ぶ土砂の塊…!? うまく想像することができないですが、とにかくまともに襲われたら逃げられっこありませんね…

「ただこの時の一連の出来事は、世界に類例をひとつも見つけることができない非常に珍しいもの。だから『天明』だけを参考に今後の被害予測をするのは現実的ではないと思います」

20万年の時を超えたキス！

このあと、沢沿いに残る火砕流の跡や、火口から土石とともに運ばれてきた大きな黒岩を観察などしていると、あっという間に夕暮れも近づいてきました。「じゃあ、最後はまた一気に時を遡ろう」と移動したのは、吾妻線の終点「大前」駅の近くの高羽根沢（❺）。目の前にそそり立つ、白っぽい地層が剥き出しになった断崖絶壁。先生は黙々とその壁に向かって、雑木林の斜面を登り始めます。

——あの、えっと、ここでは何を見るんですか？

「（無言で先を歩く先生）」

——あの、先生っ、ここだいぶ急で（ゼェゼェ）歩きづらいんですが（ハァハァ）どこに向かってるんですかー？

「（さらに無言で先を行ってしまう先生。ふだんからフィールド調査で鍛えている先生の脚力にはとても追いつけません）」

ツアーも終盤にきて突然のスパルタ展開。木の根につまづき、雪の残る地面に足を取られながら、夢中で斜面を這い上がること20分。気づいたら、先ほど下から見上げた地層がすぐ目と鼻の先の距離。白・黄・茶色のグラデーションがきれいな縞模様で残されています。

「ここには、浅間山が生まれるよりもずっと前、20～25万年前に湖があった。その湖底に堆積した地層です。ちょっと舐めてごらん」

——（言われたとおりペロリとすると、舌にぺったりと張りつきます。）これって20万年の時を経たキス!? それにしても、20万年以上前の痕跡がまだこんなにきれいに残されているなんて、まったく知りませんでした。

「この近くでいえば四阿山や草津白根山ができたのが30万年前。富士山で10万年。だから5万年しか経っていない浅間はまだとても若い山。それに最近（といっても数千年の単位のことですが）起きたことが多いから、他の山に較べて分かっていることが多い。せっかく地元にいるのだから、興味を持ってあちこち見てみると面白いと思いますよ」

20万年前にあった「嬬恋湖」の湖底層が残る高羽根沢。縞模様のシルト層がくっきりと見て取れます。

ツアー終盤に待っていた山登り。地質観察には体力・脚力が必要なことを痛感する隊員たち！

駆け足で巡った地質観察ツアー

まだまだごく一部を見ただけですが、それでも少し足元に目を向けてみるだけで、これまでごく当たり前に眺めてきた山麓の風景が、どこか違って見えてきます。丘も、林も、土も、石ころも、ただ偶然そこにあるわけではないこと。私たちの日常の暮らしは、浅間山を巡る大きな自然の営みの上に、あるときは被害を被りつつも、あるときは巧みにその恩恵を利用しながら、今。ちょうどよく。成り立っているのだなということを感じます。

「火山のふもとになんか暮らして怖くはないんですか？」ともし誰かに訊かれたら、これからはこう返そうと思います。

「火山のふもとだからこそ、ここにはたくさんの宝物が埋っているんです！」

浅間北麓 地質別MAP

お住まいの地域は、
いつの時代、どの地層の上にあるでしょう？
照らし合わせてみましょう。

塚原土石なだれ《2万4300年前》
黒斑山が崩壊して生じた土石なだれ（※1）。表面に大きな流れ山が散在します。

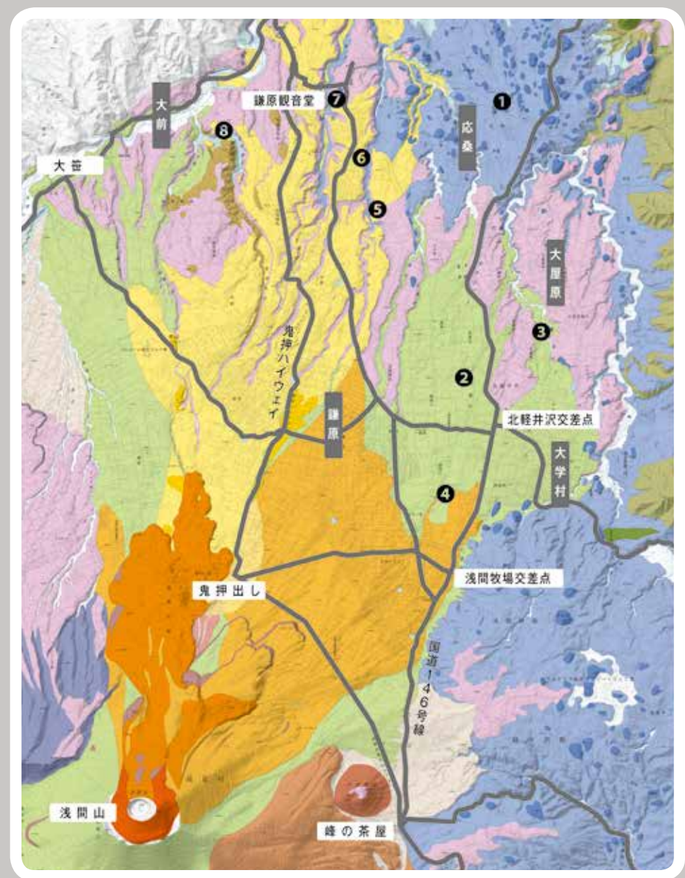
平原火砕流《1万5800年前》
浅間山史上最大の噴火の産物。北麓一体はこの堆積物に覆われています。

追分火砕流《1108年（およそ900年前）》
平安時代、1108年8月30日に発生したとされる噴火による火砕流（※2）の跡。

鎌原土石なだれ《1783年 天明3年の噴火》
1783年8月5日に鬼押出し溶岩の先端から発生した土石なだれ。

吾妻火砕流《1783年 天明3年の噴火》
1783年8月4日午後、山頂火口から北側に数回流れ下った火砕流。

鬼押出し溶岩《1783年 天明3年の噴火》
1783年8月2日午後から火口より北側に5.6キロメートル流れ出した溶岩。



❼
サンランド別荘地はずれ
別荘地の境界が、ちょうど「鎌原土石なだれ」の先端の部分に重なります。よく見回してみると、土石なだれの先端は、今でもまわりからは一段高くなっているのがわかります。

❻
サンランド別荘地管理事務所近く
鎌原周辺には「鎌原土石なだれ」で運ばれてきた大きな黒岩があちこちに残っています。なかには、表面がボコボコした「スコリア（マグマ由来の黒っぽい軽石）」が、土石なだれと一緒に流されてここまで来た例も。表面がツルツルの溶岩と、ボコボコのスコリアとを見較べてみましょう。

❷
「ルオムの森」付近の地蔵川
川沿いの断面に、「追分火砕流」が残した「溶結」（高温のまま流されてきた軽石や火山灰などが堆積後にくっつきあうこと）のあとが見られます。

❹
押切端付近の地蔵川
「吾妻火砕流」が押し寄せた際にあることから「押切端・押際端（おしぎっぱ）」と呼ばれる地域。地蔵川をよく観察すると、火砕流の先端の場所がわかります。

早川由紀夫
群馬大学教育学部教授。専門は火山地質学。浅間山をホームグラウンドに、電子地質図を作成・公開、火山学習会を開くなど、理学のみにとどまらず、工学、文学、行政など多角的な視点から、火山とその防災を研究、指導している。
趣味はロードバイク、ドローン操縦。

（※1）「土石なだれ」・・・火山体の崩壊で発生する高速の土石流。
（※2）「火砕流」・・・噴火のときに軽石・火山灰とガスが一団となって地表を流れ下る現象。

＊地図データは、著者の早川由紀夫先生の了解のもと、「浅間火山北麓の２万5000分の１地質図」のベースより拝借し、地名表記などを本記事にあわせて書き換えています。（データ作成協力：萩原佐知子氏）
＊この地質図の電子ファイルはインターネットで公開されています。http://www.hayakawayukio.jp/asamap/
＊「浅間火山北麓の２万5000分の１地質図」は、嬬恋村郷土資料館、北軽井沢観光協会、ルオムの森ほかで販売しています。（一部500円）、

「きたかる」生活絵本カレンダー 2016

平地からはひと月以上も遅れてやってくる春。
5〜7月は、植物がいっせいに芽吹き、山麓一帯がエネルギーに満ち溢れるシーズンです。
イベントや季節の情景、暮らしの知恵を集め、歳時記としても楽しめるカレンダーをつくりました。
冷蔵庫の扉や掲示板用にお使いください！

5 May

山麓に春を告げるコブシに始まり、5〜6月にかけては白い花のリレーが楽しめます。樹花なら、ヤマザクラのあとに咲くコナシ（ズミ）、山紫陽花に似たオオカメノキ（ムシカリ）、ヤマボウシ。足もとでは、ニリンソウ、ツマトリソウ、マイヅルソウ、ノイバラなど。

日 1
月 2
火 3 憲法記念日
水 4 みどりの日
木 5 こどもの日
金 6
土 7
日 8
月 9
火 10
水 11
木 12
金 13
土 14
日 15
月 16
火 17
水 18
木 19
金 20
土 21
日 22
月 23
火 24
水 25
木 26
金 27
土 28
日 29
月 30
火 31

5月初旬

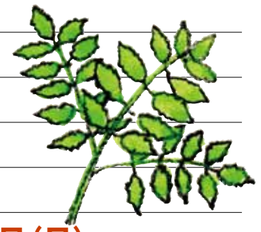
浅間山麓の住民だれもが待ちわびるカッコウの初鳴きは、例年ならこの頃。「カッコウが鳴いたらジャガイモの種芋を蒔いてよし」という言い伝えもあります。鳴き始めは慣れずに「カッ、カッ、ケホッ」と咳き込む様子も可笑しいので、耳を澄ましてみましょう。

5月7日（土）浅間山山開き

浅間山にもグリーンシーズン到来。登山口のある小諸側では、山開きに合わせてセレモニーなどが行なわれます。昨年は6月にごく小規模な噴火がありましたが、さて今年はいかに？

5月中旬

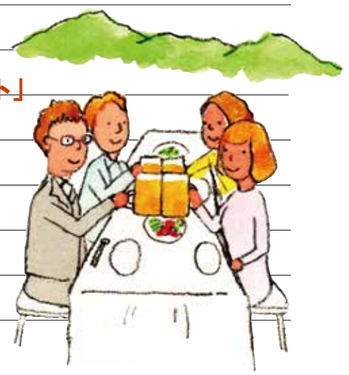
北軽井沢や嬬恋では自生のものも多い山椒の木。山椒は実だけでなく、この時期の若芽（木の芽）も香り良くぴりっとして美味。たくさん摘んだら、佃煮がおすすめ。白いご飯に、お茶請けに。風邪を引きにくくなるとも言われています。



5月22日（日）「きたかる」主催『摘み草の会』

春の味ってどんな味？　一斉に芽吹き始めた身近な山草、実は食べられるものもたくさんあります。爽やかな高原や山里の散歩を楽しみながら、この時期に採れる山菜や雑草を摘んで味わってみましょう。
●時間：9:00 ～ 11:00　●定員：5名　●お申込み・問合せ：「きたかる」ホームページより

5月28日（土）「長野原町婚活イベント『花マメンズ』プロジェクト」



「花マメンズ」による婚活イベント開催。「花マメンズ」とは、長野原特産である花豆のように、寒冷な高地で逞しく生まれ育った地元男性の会です！豊かな自然あふれる長野原町の魅力を伝えつつ新しい出会いを求め、「婚活」のセルフプロデュースを行っています。●問合せ：0279-82-2244（長野原町企画政策課）

※各イベントの詳細・その他のお知らせは、「きたかる」のホームページ　kitakaru.me　をご覧ください。
※四季を通じて生活絵本カレンダーへの情報募集中！

6 June

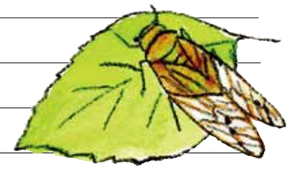
水 1
木 2
金 3
土 4
日 5
月 6
火 7
水 8
木 9
金 10
土 11
日 12
月 13
火 14
水 15
木 16
金 17
土 18
日 19
月 20
火 21
水 22
木 23
金 24
土 25
日 26
月 27
火 28
水 29
木 30

6月3日（金）カフェドフルミエール主催『酵素シロップをみんなでつくる会』

フルミエール提携農家から届く旬のフルーツを使って酵素シロップを仕込みます。パティシエがみなさんに作り方のコツをお教えする会です。主役のシロップはご自宅に帰った皆様プラス酵素の力で出来上がります！是非ご参加ください。
●時間：13:00 ～●参加費：2500円（漬物樽5型以上持参の方は500円引き）●定員：10名●持ちもの：エプロンのみ●問合せ：「きたかる」ホームページより

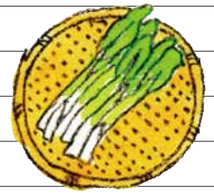
6月初旬

北軽井沢の初夏の風物詩、エゾハルゼミの大合唱が始まる頃。晴れて、一定の高い気温が数日つづくと鳴き始めます。涼しい地域の森林にのみ生息する小型のセミ。鳴き声が独特でヒグラシにも似ているので、よそから来た人には「もうヒグラシが？」と驚かれます。



6月中旬

6月はヤマドリやキジの繁殖期。草地から「ドドドドド」と、雄が翼を激しくはばたかせるドラミング（ほろ打ち）の音が聞こえてきてびっくりすることも。ヤマドリやキジは10個ほどの卵を産みますが、試しにそっといくつか減らすと、次の日には同じ数だけ産み足す性質があるそうです。（可哀想なのでマネはしないこと！）



6月中～下旬

新緑の森、半日陰の足元では、ラッパ型のオオバギボウシの芽が群生しています。別名、ウルイ。独特のぬめりとキュッキュッとした歯ごたえが特徴で、アクがないため食べやすい初夏の山菜のひとつ。軽く茹でて、酢味噌和えでどうぞ！

6月19日（日）「第29回 北軽井沢マラソン」

県外からも多くの参加者が集まる、北軽井沢を代表するイベント。爽やかな風が心地いい反面、意外とアップダウンの激しいコースに上級者も苦戦することも！申込み締め切りは5月末まで。●問合せ：0279-84-2047（北軽井沢観光協会）

6月下旬

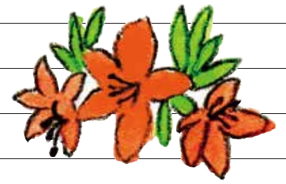
標高の高い北軽井沢では、ホタルも平地より少し遅れて現れます。6月下旬から7月上旬にかけて、「照月湖」と周辺の渓流沿いで、無数のゲンジボタルの舞う幻想的な光景が見られます。（照月湖は要入場料）

6月下旬　「きたかる」主催『森の写真館』による新緑のルオムの森の中での記念写真！

新緑も最盛期を迎える北軽井沢の森で、ポートレートを残してみませんか？　草木のエネルギーに満ち溢れる森では、不思議と写真写りがぐっと良くなります！写真家・田淵章三＆三菜さんによる「森の写真館」が、家族の、個人の、大切な一枚を撮影します。
●お申込み・問合せ：「きたかる」ホームページまたは0279-82-1575まで（10:00 ～ 17:00）

7 July

金 1
土 2
日 3
月 4
火 5
水 6
木 7
金 8
土 9
日 10
月 11
火 12
水 13
木 14
金 15
土 16
日 17
月 18 海の日
火 19
水 20
木 21
金 22
土 23
日 24
月 25
火 26
水 27
木 28
金 29
土 30
日 31



7月初旬

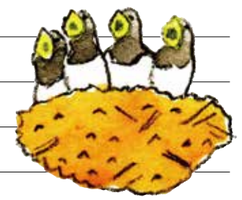
浅間山麓を代表する花、レンゲツツジがそこここで見頃を迎えます。別名を鬼ツツジといいますが、どうして「鬼」なのでしょう？毒があるから？（レンゲツツジは有毒なので蜜は吸ってはいけません。）他のツツジに較べて大きく荒々しいから？　詳しい方いらしたら教えてください！

7月3日（日）「第9回 嬬恋高原キャベツマラソン」

バラギ高原からパノラマラインをひた走る、浅間北麓のもうひとつのマラソン大会。参加賞としてもれなく高原キャベツがもらえます！●問合せ：0279-96-1515（嬬恋村観光商工課）

7月中旬

この春に産まれた鳥のヒナたちが、野山や軒先の巣のなかで餌をねだって大騒ぎ！この巣立ち前の幼鳥のことを、一部地元の人たちは「たちっ子」と呼んで可愛がります。たちっ子、言葉の響きも可愛らしいですね。見かけたら「おーい、たちっ子！」と呼んでみましょう！



7月16日（土）～「YOKAN de marché in ルオムの森」

モノ・コト・ヒトがつながる森の中のマルシェ。百年の洋館に、浅間北麓を中心としたファーマーによる農産物・クラフト雑貨などのブースが並びます。●7/16、17、18、30、31（8月も開催あり）●10:00 ～ 15:00●問合せ：0279-84-1733（ルオムの森 洋館）

7月中旬

国道沿いに野菜の直売所が次々にオープン。春先からのレタス、キャベツに加えて、夏野菜が出揃います。なかでも地元民・観光客を問わず楽しみにしているのが、北軽井沢の夏の味覚・トウモロコシ。5月上旬に植えられたものが初出荷の時期を迎えます。

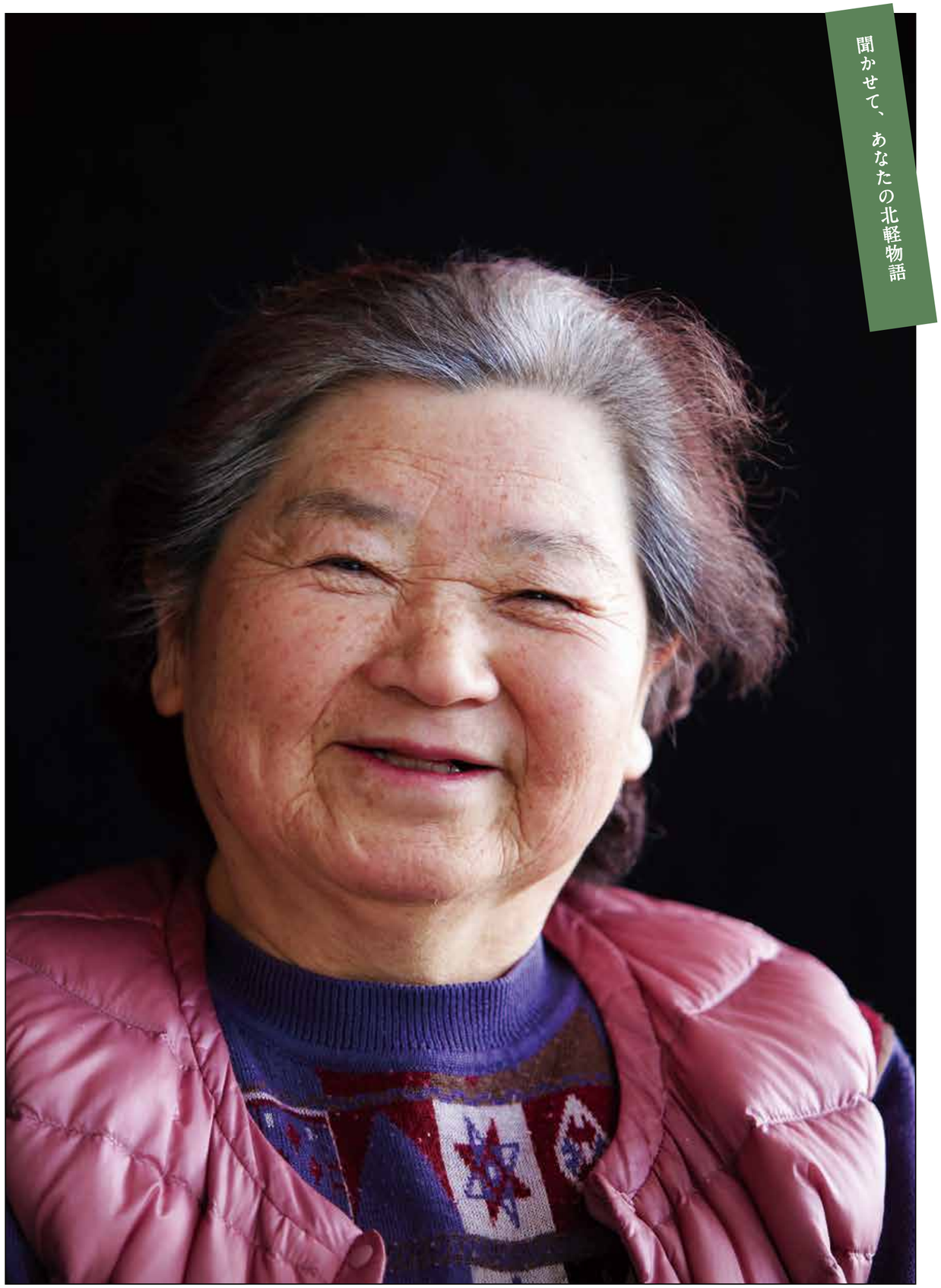
7月20日（水）「きたかる」主催『天丸山で満月を観る会』

お月見といえば秋ですが、北軽井沢では秋の夜長はもう肌寒い。ということで、ゆっくりビールでも片手に月を見上げるには、この時期がおすすめ！その名も「天丸山」に登って、山の上から真ん丸なお月様を観賞しましょう。
●お申込み・問合せ：「きたかる」ホームページより

7月中～下旬

この時期、「森じゅうに甘酸っぱい匂いが漂う日がある！！」という情報を、数名の住民から聞き取りました。温度や湿度など一定の条件が揃ったときに、おそらく虫寄せのために、森の木々が一斉にある香りを放つのだとか。感知には個人差があるようですが、今年その日がわかったという方は、編集部までぜひご一報ください！

イラストレーション／加藤彩子



昔、店に来た子どもたち。みんな今はいい若い衆になってね。今度は自分の子どもを連れてきてくれたりね。そういうのは楽しみですよね。

（霜田久子さん・79歳）

北軽小出身の「浅間っ子」や、古くからの別荘滞在者ならご存知、「駅前の霜田のおばちゃん」こと霜田久子さん。昭和8年、ご主人の芳夫さんのご両親が写真館を開業。昭和27年からは土産店も開き、ご主人は写真店を、久子さんが土産屋を、忙しく切盛りしてきました。旧駅前が閑散としてしまった今も、毎朝シャッターを開け、冬には雪かきをする姿もしばしば見かけます。

かつての「浅間っ子」たちよ！「霜田のおばちゃん」は、元気です。店先のトレードマークの牛とウサギのイラストはだいぶ剥げ落ちてしまったけれど、入口の扉は、今日も開いています。

お嫁にきたの？昭和34年です。電車（草軽電鉄）もまだ走ってたから、このあたりはそりゃあ賑やかで。こっから鬼押出し行きのバスが出てたでしょう。照月湖も、浅間牧場も、人がたーくさん来たんだから。こんな小さな店でもね、大忙しで。ウィンドウに並べたものも、バンガローに来る学生さんたちがお土産にって買っていって、すぐ空っぽになっちゃう。

アルバイトのひともたくさん雇ってね。大学生さんとか次々来てもらいましたよ。そうしないと回らないんだもの。なかに、あとでそこの小学校の校長になったひとが「僕も昔ここでアルバイトやらせてもらいました」って言われて驚きましたよ。お父さんがつくる絵葉書を配達してもらってたの。お給料がよかったんだーなんて言ってましたね（笑）。

このへん、ほかにもお土産さんはいっぱいあったの。観光協会のところもそうだし。電車がなくなって、道路があっちに（今の国道のこと）移ってね、それで変わっちゃいました。ほかのひとは、だんだんダメだから止しちゃった。みんな、早逃げですよ！うちもいつどうしようかなと思ってるけど、こんなもの、片づけるのも面倒だしねぇ。

駄菓子？子どもたちもいなくなっちゃったからね。今はほとんど買いにも来ないけど、昔はこのへんの子、よく来ましたよ。それがほら、みんな今はいい若い衆になってね、いいお父さんとお母さんになって、今度は自分の子どもを連れてきてくれたりね。ああ、おばさん久しぶりーなんて言って。これも面白いですよねぇ。みんな性格だって知ってるんだもの。そういうのは楽しみですよね。

生まれは嬬恋ですけど、実家のおじいちゃんはこっちを出て東京の大森にいたの。父がこっちに戻って地元の人と一緒になって。大森のうちは戦争で焼かれちゃって。

私も二十歳の頃、2年くらい東京にいたんです。文京区、雑司ヶ谷の親戚のおばさんちに置いてもらって、洋裁を習いに行ったの。細かいもの作ったりね、好きだったから、それで身を立てようと思って。《お顔がキリっとする。》（今も店内に並ぶお手製のクッションやリースなどを差して、）そう、あんなのもつくりますよ、昔やったからね。こういうのはね、色合わせがすべてなの。《ここでもう一度キリっ。》

でもまあ、縁なんてね、ヘンなものですよね。町会議員の選挙のお手伝いで北軽に来て、そんでなんだかそんな話（結婚のこと）になっちゃったの。まあ、それが最後だね《うふふ》。今はなにも言ってもしょうがない《あはは》。東京はねえ、あんなごみごみせかせかしたのはやだかったね。ちょうど時代だったからだけど、あんな空気の悪いところでよーく生きてんなあと思いましたよ。自然のほうがいいなあって。

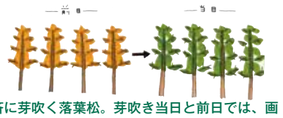
北軽あるある

初めて訪れる人からしたら「なんじゃそら」な、北軽井沢ならではの常識。
東京から２時間半…の割に、いろいろ違う点があるのです。
このコーナーでは、キタカリアン（北軽に住む人、足繁く通う人の意）
ならではの常識をご紹介していきます。

５月から７月にかけての「あるある～初夏編～」

カッコウの声に心弾ませて迎える初夏。
初夏と言えば思い浮かべるのは、新緑だったり、
素足にスニーカーのような爽やかさ。でも…

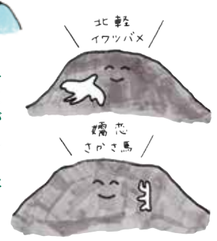
「あるある１」
北軽井沢では５月の連休にも雪が降る。
（キタカリアンは５月の中旬までスタッドレスタイヤを脱がない）



「あるある２」
５月の暖かい雨の日に、
申し合わせたかのように一斉に芽吹く落葉松。芽吹き当日と前日では、画像加工の色補正をかけたほどに違う。自然が見せる魔術のよう。

「あるある３」
カッコウの初鳴きを聞いた自慢。地元の誰より早く聞きたがる。

「あるある４」
この時期の名物、浅間山に残る雪形。キタカリアンは愛おしげに雪形を見、熱く語る。しかし、訊く人によって捉え方が微妙に違う。細かいことは気にしない、キタカリアン。
（北軽からは「イワツバメ」、嬬恋からは「さかさ馬」のように見える）



「あるある５」
初夏から鳴きだす「エゾハルゼミ」。ミョーキン、ミョーキンという変わった鳴き方が特徴で、夏本番にはいつの間にかいなくなっている。そのためキタカリアンは、快適な気温とエゾハルゼミの声がセットになって刷り込みされている。

「あるある６」
新緑の森や草原を散歩していると、ぼーっと突っ立っている人に出くわす。具合でも悪いのかと心配すると、あんまりに綺麗で見惚れていたのだという。感受性豊か、キタカリアン。

「あるある７」
作り手は美味いものを知っている。それゆえ、
６月上旬の早採れレタスは必ず自分の家で食べる。

「あるある８」
夏でも冷たい水道水。５分と手を付けていられない。よそから来た人が冷たさにはしゃぐのを見て、どことなく誇らしげなキタカリアン。

「あるある９」
北軽井沢に縁ある人はみな、この土地のことを「きたかる」と呼ぶ。
（この冊子の名はそこから取りました）

イラストレーション／田淵なな

笑え、浅間っ子！

おばあちゃんも、お父さんも叩いてた。僕らも叩くよ、浅間鬼押し太鼓。

夏の「高原祭り」や秋の「わくわくフェスタ」など北軽井沢のお祭りで、勇壮な和太鼓の演奏を聞いたことはありませんか。この演奏の主こそ、我らが「北軽井沢浅間鬼押し太鼓」。北軽井沢の子供たちを中心にした、和太鼓グループです。

3月のある夜、北軽井沢ミュージックホールでの稽古に伺ってみると、そこには元気いっぱいの子供たち。この春小学校に入る子から晴れて社会人になる高校三年生まで、12人がバチを手に集まっていました。友達とふざけていた小さい子たちも、いざ稽古が始まるとビシッと真剣な眼差しに。「上州」「からっ風」とスピーディに続く演奏。子供たちのりんごのほっぺが、ますます上気していきます。

「浅間鬼押し太鼓」は昭和47年、この子供たちの祖父母の代が発足させました。稽古場の壁には、約45年の歩みを物語る写真や演奏会のポスターが貼られています。黄色く変色したスナップの中には、いま一心不乱に稽古している子供たちのおじいちゃんやおばあちゃんの若かりし頃の笑顔、お父さんやお母さん、おばさんやおじさんの子供の頃の笑顔が、たくさん写っているのです。

「家でもバケツ叩いて練習するんだ」「ゲームも好きだけど太鼓やってる時は太鼓が好き」と話す子供たち。今年もきっといい響きを聞かせてくれるはずです。

〈第一回〉北軽井沢大学村「恩地邸」

「きたかる建物応援団」がゆく！

絵・文　伊郷吉信

どんよりとした曇り空の下、今にも雨か雪が降りそうな天気だった。ここは北軽井沢大学村一条通り。取材のため車を止めると、この家の御当主の恩地惇さんが声をかけてくださった。

大学村は昭和2年、法政大学学長松室致の発意により建設が始まり、昭和3年には「法政大学村住宅組合」がつくられた。以降、北軽井沢にサロン的な山荘文化を育んできた。大学村の中にある照月湖周辺には、戦前の建築と考えられる建物が多く残されている。

6年ほど前に大学村を訪れたとき、「恩地」と標識がある茅葺き大屋根の家を見つけた。思い浮かんだのは恩地孝四郎。私の好きな画家、版画作家である。日本における抽象画の先駆者と評される。今年になってからも国立近代美術館で大規模な回顧展が開催された。推測は、当たらずとも遠からずだった。この家は恩地孝四郎の長女恩地三保子の家だったのである。恩地三保子は「大草原の小さな家」「若草物語」「あしながおじさん」など英米児童文学の翻訳家として知られている。お話を聞いた恩地惇さんは三保子の次男で大学卒業後、吉村順三建築設計事務所に勤務し、栄久庵憲司と出会い、日本の工業デザインの草分けであるGKインダストリアル デザイン研究所 京都事務所に長年勤めた。この家の改修や増築設計は惇さんの設計によるものである。

「自由建築研究所」代表。協同組合「伝統技法研究会」副理事。NPO「あさま北軽スタイル」理事。設計活動とともに、建物保存活用のためのアドバイス、調査、研究を行なう。「こぶしの家移築プロジェクト」「狩宿茶屋本陣調査」等、北軽井沢、長野原町とも縁が深い。

家の外観は茅葺の大屋根で大学村の中でも一際、目を奪われる。茅葺屋根が多いのは大学村の特徴の一つであるが、この家の間取りと構造から見ると農家建築のように茅葺屋根の必然性がないように思える。民芸運動が盛んだった戦前には民家趣味が流行したが、その影響があったのかもしれない。

家の敷地は西から東に熊川に向かってなだらかな斜面となる。各部屋の東に向いた窓には改修された大きな引き込みガラス戸がある。外の自然をインテリアに引き込む手法で吉村順三の影響を感じさせる。特筆したいのは惇さんが増築を手掛けた恩地三保子の書斎である。東一面がガラス窓となりその前に机となる無垢のテーブル板が造り付けられている。足を入れる掘り炬燵があり、ここで多くの名作を翻訳したという。翻訳の合間に疲れた目をいやし、自然の林を見ながら想像を働かせたことと思う。

和室には恩地孝四郎が描いた恩地三保子の小さい頃の肖像画があり、また、小さな惇さんのために魚を描いた版画もあった。展覧会では見られないものだった。三代にわたる恩地家の家族愛を感じさせる家である。

大きな景色

絲山秋子

二〇〇五年の春、私はまるでキャンプに出かけるように寝袋と折りたたみ椅子、それにヤカンとマグカップだけを車に積んで、高崎市内のアパートに移住した。好きな景色のなかに住みたくて、会社員時代に赴任していた群馬に戻って来たのだった。

朝早くから仕事をして、夕方になると毎日、窓から外を眺めた。妙義山から浅間隠山へと連なる山々のラインがよく見えた。その向こうに聳える浅間山は50キロ以上離れた高崎から見ても立派だった。私は、夕日が沈む場所が春から夏へ、秋から冬へと日々変わることを初めて実感した。

大江健三郎氏の『さようなら、私の本よ！』が刊行されたのはその年の9月末だった。小説に描かれる「小さな老人（ゲロンチョン）」、「おかしな老人（マッド・オールド・マン）」と名付けられた北軽井沢・大学村の別荘は、私が見ている夕焼け空の下に位置しているはずだった。どこまでが自分の見ている風景で、どこからが小説の舞台なのかわからなくなった。

それから十年経った今でも、春になると山の方に行きたくてたまらない。平地の桜が開花した3月末、北軽を目指した。

高崎から榛名山の西側の国道406号線を倉渕へと走る。権田の信号を曲がって県道54号線に入れば、山が、皮膚で感じられるほど近い。やがて人の住むエリアは終わり、二度上峠となる。二速を使いながら登っていくと、突然浅間が目の前に現れる。少しずつ近づくのではなく、浅間がいきなり巨大な姿をあらわすのだ。視界の半分以上が浅間山になってしまったような気がして、運転しながら「おおっ！」と叫んでしまう。

冬の間、ちまちま暮らして大きなものを見ていなかった。

そして小さな悩みやこだわりは、どこかに行ってしまったと思った。

峠を下りれば、白樺が混じる林に洋風の別荘が点在する北軽の風景になる。久しぶりの信号を右に曲がれば、今度は白根がフロントガラスいっぱいに広がる。ここでは、大きなものはひとつだけではないのだ。いつ来ても新鮮で、痛快だ。

絲山秋子（Akiko Itoyama）
作家。1966年東京都生まれ。早稲田大学政治経済学部卒業。群馬県の住宅設備機器メーカーに入社し、2001年まで営業職として勤務。03年「イッツ・オンリー・トーク」で文學界新人賞を受賞。06年「沖で待つ」で芥川賞を受賞。05年より高崎市に移住。近著に、群馬県を舞台にした小説「薄情」（新潮社）、紀行エッセイ「街道を行く」（上毛新聞社）など。

編集後記

幼少の頃からたびたび訪れていた「北軽」に、どっかり腰を落ち着けることになって早12年。雄大な浅間山の裾に広がるおおらかな風景、ドラマチックな季節の移り変わり、すぐ身近にある動植物の逞しい野生の姿に、驚き、感心するうちに、あっという間に干支がひと巡り。次々と正体を現すこの土地の不思議な魅力に、ますますとらわれていくばかり。

そんな折、数年ぶりに復刊となる『きたかる』の制作に携わることとなり、待ってました！ と喜ばしい反面、ひとつの不安がむくむくと。自分にはまだ北軽井沢の魅力をひと言で言い表すことができない。この誌面で何を伝えていったらいいのだろう…。仲間とも何度も意見を交わすうち、ある一人がこう言った。「わからないこと、うまく言い表せないことを、見つけていくための冊子にすればいい」のだと。そう、だからこの『きたかる』は、私たち作る側が、読む人と一緒の目線で地べたに座り込み、土地に埋もれる宝をひとつひとつ掘り起こしていく「発掘作業」のようなもの。

わからないなりに確信していることもある。それはこの北軽という場所が、もともとここに暮らす「地の人」と、この場所が好きで繰り返し訪れる「風の人」、双方の「人」の力によって、他にはない独自の「風土」を作り上げているということ。今号でも、世代を超えて受け継がれる狩猟文化、浅間を愛し研究を続ける人、ひとつの時代を支え続けてきた店、未来に向かって奏で合う子どもたちなど、それぞれの「人」の北軽への自負や愛着を肌で感じることができた。（ご協力いただいた皆様、ありがとうございます！）

これからも「地の人」と「風の人」の間をくるくると舞う〝つむじ風〟のように、体当たりで宝探しを楽しんでいきたい。皆さんにも面白がってもらって「まだまだこんなお宝があるよ」と耳打ちしてもらえたら、これ幸い！（F）

きたかる vol.4（リニューアル創刊号）
２０１６年４月発行
企画・編集・制作／きたかる編集部
［編集長］藤野麻子［編集］AKIKO・福嶋悠貴 ［写真］田淵章三・田淵三菜（森の写真館）［デザイン］田淵章三［WEB 制作］G+G
発行／北軽井沢じねんびと
印刷／上毛新聞 TRサービス
※この冊子は長野原町の助成を受けて発行しています。

お問合せ：きたかる編集部
メールアドレス：info@kitakaru.me
住所：〒377-1412 群馬県吾妻郡長野原町北軽井沢 1924-1360
「きたかる」へのご意見・ご感想をお寄せください。

「きたかる」ホームページ http://kitakaru.me
北軽井沢の季節の風景、イベント、取材こぼれ話など、WEB 版も更新しています。

※本誌掲載の写真・文章を無断で複写・複製・転載することを禁じます。